羽仁吉一の先祖と郷里

笠原芳光

序章　羽仁吉一とは誰か

羽仁吉一は知られざる人物である。

およそ羽仁家といえば「華麗なる一族」の言葉で評されることもある家系といってよい。羽仁もと子は『婦人之友』と自由学園を創始し、発展させたジャーナリストにして教育者、その長女羽仁説子は教育運動家、その夫羽仁五郎は歴史学者にして評論家、この二人の長男羽仁進は映画監督、その先妻であった女優左幸子との間に長女でタレントの羽仁未央がいる。もと子の次女涼子は夭折したが、三女羽仁恵子は二代目の自由学園長、五郎と説子の長女立子は早逝したが、次女羽仁協子はコダイ芸術教育研究所長、三女羽仁結子は双葉保育園保母である。

ところが、その大本になっている羽仁吉一、すなわち羽仁もと子の夫はそれほど世に知られていない。およそ羽仁という姓は、この吉一から出てきたのであり、それまでは地方の下級士族であった羽仁家を、ジャーナリズム、教育界、学界、芸術界、芸能界に登場させるきっかけを創ったのがこの人であった。そして無名といえば言い過ぎになるが、むしろ意図して脇役に廻り、縁の下の力持ちに徹し、妻、娘、婿、孫たちを生かし、活躍させた男であった。

朝日新聞社編『現代人物事典』[1]は内外あわせて七千人の現代人を網羅しており、そこに「羽仁もと子」、「羽仁説子」、「羽仁五郎」、「羽仁進」の項目はあるが、「羽仁吉一」はない。ただ彼等の夫や父として名があげられているだけである。まさにこのような記述が羽仁吉一に対する世間の認識をそのまま反映しているといえよう。

筆者はかつて鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』[2]という本に「女を生かした男——羽仁吉一論」を書いた。それは羽仁吉一が妻という女を育て、動かし、生かした、近代日本では数少ない男であるという視角から、その生涯と思想のあらましをのべたものである。そして、いずれは評伝を書くことを考えて、その後もこの人物の、とくに先祖、郷里、生家、幼少年時代を調べてきた。ここではそれに基いて現在までに判明した事柄を記してみたい。それに先立って、おもにさきの拙論を要約する形で、その人と思想についての素描をしておきたい。

羽仁吉一は明治一三年（一八八〇年）五月一日、山口県の瀬戸内海沿岸の港町三田尻において、かつて毛利藩の下級士族で、維新後も毛利家に勤めていた父羽仁鶴助と母イヨの長男として生まれた。華浦尋常小学校をへて、周陽学舎に学んだが、中退して上京、ジャーナリストにして政治家の龍渓矢野文雄の書生となり、矢野がかつて社長をしていた報知新聞社に入社、とくに政治関係の記者として敏腕を揮い、編集長にもなった。その間、矢野の影響でユニテリアン協会に出入りし、惟一館で講演したり、『六合雑誌』に寄稿したりした。また『万朝報』主筆涙香黒岩周六の提唱していた理想団にも関係した。

やがて報知新聞社で先輩、かつ七歳年長の婦人記者であった青森県八戸出身の松岡もと子と明治三四年（一九〇一年）一二月に結婚した。社内結婚ということでもと子は退社、吉一は新潟の高田新聞社に転勤、その後、一時、読売

新聞社や電報新聞社に勤め、後者の編集長にもなった。長女説子が生まれた明治三六年（一九〇三年）四月から電報新聞社勤務のかたわら、山県悌三郎の経営する内外出版協会から、夫妻協力の編集によって『家庭之友』を創刊、それと並行して、もと子の弟松岡正男とともに明治四〇年（一九〇七年）一一月から『青年之友』を発行した。この雑誌は翌年一〇月で終刊、『家庭之友』も明治四一年（一九〇八年）一二月で終り、同誌と併せて発行していた『家庭女学雑誌』を改題した『婦人之友』を明治四一年（一九〇八年）一月から創刊した。続いて大正三年（一九一四年）四月に『子供之友』、大正四年（一九一五年）四月には『新少女』を創刊、この二誌は永続しなかった。大正一〇年（一九二〇年）四月に新しい教育理念による学校、あえて文部省令によらない各種学校としての自由学園を創立した。

その間、明治三七年（一九〇四年）に次女涼子が生まれ、翌々年に死亡、続いて明治四一年（一九〇八年）に三女恵子が生まれた。また大正八年（一九一九年）には日本基督教会富士見町教会で牧師植村正久から長女説子とともに洗礼を受けた。植村も、またその後輩の牧師高倉徳太郎も羽仁夫妻に協力し、自由学園の礼拝で聖書を教えたりした。昭和五年（一九三〇年）には『婦人之友』の愛読者の全国組織である友の会を結成し、昭和一〇年（一九三五年）からは自由学園に男子部を設けた。昭和一一年（一九三六年）には東北地方六箇村に農村生活改善運動としての東北セッツルメントを設け、昭和一三年（一九三八年）には日中戦争の最中に北京に中国人少女の生活教育のための北京生活学校を開き、昭和一四年（一九三九年）から東京を始め全国のいくつかの友の会に幼児生活団を置き、昭和一六年（一九四一年）には自由学園の那須農場を建設、戦後は昭和二四年（一九四九年）に自由学園に文部省令によらない大学としての最高学部を設置した。

『婦人之友』の原稿執筆や座談会出席、自由学園の講演には、多くの、とくにリベラルな思想家を依頼した。たと

えば雪嶺三宅雄二郎、如是閑長谷川万次郎、安部磯雄、杉森孝次郎、加藤与五郎、出隆、清沢冽、蠟山政道、天野貞祐、斉藤勇、東畑精一等などである。『婦人之友』の表紙は長く平福百穂が描き、掲載の小説、翻訳、詩歌などにもすぐれた作家たちの作品が選ばれ、また婦人之友社や自由学園の設計はフランクロイド・ライトや遠藤新が担当した。

羽仁吉一はこれらの多彩な事業を統括したが、つねに妻もと子を前面に立て、自分は陰にあって協力する形をとった。それは執筆者を動かす編集者の思想ともいうべきものである。この姿勢を終生貫いたため、もと子には全二〇巻の『羽仁もと子著作集』[3]があるが、吉一の著書は僅か二巻の随想集『雑司ケ谷短信』[4]があるだけである。この本は昭和七年（一九三二年）から、亡くなる昭和三〇年（一九五五年）までの二三年間、『婦人之友』の巻末に無署名で書かれた約一千字の短いエッセイ二六六篇を集めたものである。その簡潔、明晰で雅趣に富む文章は吉一がすぐれたエッセイストでもあることを表わしており、この人の思想を窺い知る唯一のまとまった史料となっている。

その特色のいくつかは、漢学的素養、ナショナリズム、一流主義、フェミニズムといった言葉で表わすことができるだろう。吉一の祖父は漢学にすぐれていたといわれ、周陽学舎という漢学を重視する私立中学で学んだこととともに、かなりの漢詩文の素養があった。「雑司ケ谷短信」にも孔子、孟子、白楽天、陶渕明、荻生徂徠、二宮尊徳、広瀬淡窓などの文章や詩が引用され、論評がなされている。自由学園でも漢文を教えたが、それらは体系的な知識ではなく、また学問というよりも教養というべきものであった。そして儒教的な道徳にキリスト教ピューリタニズムのモラルが加味された倫理主義が、その教養の骨格を形成していた。

また素朴な意味で日本という国を愛し、それと運命をともにするというナショナリズムがあった。それはとくに国

家主義とか、あるいは土着主義というものではなかったが、皇室に対する尊敬や戦争に対する協力は当時の多くのまじめな国民と同程度になされた。しかし、たとえば自由学園の「自由」の文字を変えるよう軍部に要請された時には抵抗して、それを貫く信念の人でもあった。また、その自由学園では戦後も日の丸を掲げ、「君が代」を歌い続けるという頑固さも持ち合わせていた。

同時に、士族出身の紳士的な性格や品位を重んずる趣味からくる一流の人物や事物への愛好があった。雑誌の寄稿者や学園の講演者を見ても、当時の各界の第一人者やエリートが多く、またそれらの人々が羽仁夫妻のシンパサイザーとして、雑誌の愛読者となり、子女を学園に学ばせる例も少なくなかった。もっとも、高い理想に基いて、合理的な生活思想を教える自由学園ではあったが、学費は高額で庶民階級には手の届きかねるところがあった。

そして当時においては稀といってよい、女性、とくに夫人尊重の思想があり、それも自分は背後に退いて、むしろ積極的に妻を引立てることに生き甲斐を覚えた人である。それはいわゆる愛妻家とは違って、意見の対立から人前で夫妻が激しく口論するところもあったという。

そして昭和三〇年（一九五六年）一〇月二六日、神奈川県二宮の別荘で妻に先立って心筋梗塞で亡くなった。歿後二五年、羽仁吉一はすでに歴史上の人物になりつつあるといってもよいだろう。このような人物について、その先祖、郷里、生家、幼少年時代といった問題を可能な限り詳しく本論においてのべることにしたい。この人は世に知られざる人物であるだけでなく、あえてそうなることに努めたところもあって、不明な部分が少なくない。そのため歴史的に順を追って精粗なく叙述することは困難であり、問題が飛躍するところが出てくることは避けられないだろう。

(1) 朝日新聞社編集発行『現代人物事典』昭和五二年。
(2) 鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社、昭和五四年。
(3) 『羽仁もと子著作集』全二〇巻、婦人之友社、昭和二―三八年。
(4) 羽仁吉一著『雑司ヶ谷短信』上・下二巻、婦人之友社、昭和三一年。

第一章　先祖の島―平郡島

羽仁吉一の先祖はどこに住んでいたのだろうか。あまり多くは見かけない羽仁という姓はどこから出ているのだろうか。

この問題については、従来、だれも調べた者がなく、本人もそれほど知っていたとは思われない。いったいに吉一は妻に対しては、私的というよりも、いわば公的な関心を持っており、しばしば論じもしているが、自分の父母、郷里、先祖についてはまったくといってよいくらい沈黙している。吉一自身はその著述のなかで郷里について言及しているのは、ただ一箇所、それも一言しかのべていないのである。それは『婦人之友』の昭和一四年（一九三九年）四月号の「北京往復日記」と題する「雑司ケ谷短信」の始めに、「二月十九日。夜九時東京駅発　〇二十日。三田尻下車、雨中展墓。夜下の関。連絡船」とあるのみである。これは北京生活学校開校のため、北京へ往復する途中、郷里の三田尻に寄って雨の中を父母親族の墓に詣でたというだけのことを表わしている。

長女の説子はその著『私の受けた家庭教育』[1]において、父吉一の父羽仁鶴助、母イヨ、吉一の弟軍二、そして三田尻や毛利藩のことなどを少しのべているが、それ以前の問題にはまったく触れていない。また三女の恵子が昭和五〇

年（一九七五年）一〇月に編纂し、執筆もしたと思われる『羽仁吉一先生逝去二〇年にあたりて』という小冊子にも、「羽仁吉一先生は明治一三年五月、山口県三田尻村（現在の防府市）の毛利藩に仕えた士族の家に、羽仁鶴助の長男として生まれ」[2]と書かれている以外、吉一の出身については語られていない。

ところで羽仁吉一の先祖は平郡島という島から出ているのである。この事実がわかった発端は昭和五四年（一九七九年）一〇月に東京、お茶の水の山の上ホテルのロビーで吉一の孫に当る羽仁進に会ったことから始まる。進は祖父に対する敬意を持ちながら、出身地のことについてはまったく聴いていないといって、郷里の防府には祖父のことを多少知っている老婦人がいるから、その人に会ったらどうかと勧めてくれた。それは兄部（こうべ）みや子という老未亡人で、防府では古い家柄の人であり、吉一とも親交のあった人だという。そして進も最近、防府に行った際、吉一の父母の墓に案内してもらったとのことであった。

そこで昭和五五年（一九八〇年）三月、山口県防府市宮市に住んでいる兄部みや子を訪ねた。毛利藩の家臣で、宮市の本陣であったという古い屋敷の庭には大きな蘇鉄の木が何本も植えられていた。みや子は吉一に関する思い出話とともに、自分も羽仁の先代のことに関心を持っているという。防府には現在も羽仁吉一の親戚がいるとのことで、その人から最近、聴いた話ではどうも平郡島という柳井の沖にある島らしい、そこにはいまも羽仁という名のついた保育園があるようだとのことだった。さらに吉一の父鶴助の、そのまた父は柳助ということもわかった。

そして話のあと、吉一の父母である羽仁鶴助とイヨの墓が防府市桑山の共同墓地にあるのを案内してもらった。それは野村望東尼の墓の傍らにあった。表に「羽仁鶴助　同イヨ墓」、裏にそれぞれ「大正四年二月十日永眠　昭和十二年四月六日永眠」とある。近くには「羽仁家之墓」という新しい墓もあり、裏に「昭和五十四年八月　羽仁正人政

枝建之」とあった。この吉一の親戚にはのちに会うことになる。

それから調べてみると山口県柳井の沖、大島の少し南に平郡島という小さな島があり、柳井市に所属している。国土地理院発行の二五万分の一の地図の一つに「平郡島東部」というのがあるが、それを見ると確かに羽仁という地名が記されている。だが、その時にこの平郡島が近世史上、三田尻と密接な関係にあった事実を知らなかったので、同じ山口県でも柳井沖という三田尻から離れた場所であり、こんな孤島からほんとうに羽仁家が出てきたのだろうかと半信半疑であった。

その時、ふと平郡島に近い大島出身の近世日本史家に奈良本辰也がいることを思い出し、電話で尋ねてみた。奈良本はかつて羽仁五郎とも親しい関係にあったから、あるいは聞き及んでいるかと思ったのである。奈良本はなにも聞いていないが、平郡島は平家の落人が流れついたといわれる小さな島で、おそらく違うだろう。たとえば『近世防長人名辞典』[3]に羽仁稼亭という人物が載っており、長門国美弥郡大田の出身、萩藩士、明倫館で教えた書道家とあるが、そんなあたりではないかということであった。

そこで一応、平郡島はそのままにして、吉一の父の代まで毛利藩の士族であったということから、毛利藩関係の文書を調べることにして、その方面の宝庫といわれる山口市の山口県文書館を昭和五五年（一九八〇年）四月に訪ねた。専門研究員の田村哲夫に相談すると、羽仁という姓の士族は毛利の家臣にはいくつかあるということだった。『金禄券根帳』第二号という、毛利藩の武士に明治維新後に支払った退職金の記録があり、羽仁という姓は十数名出ているが、羽仁鶴助や柳助はない。「旧長藩諸臣一覧表草稿」と題され「大正五年一二月ヨリ取調着手」とある文書にもなく、近年、編集発行された『萩藩閥閲録』全四巻、「遺漏」一巻[4]にも、羽仁という姓は多く記されているが、鶴助、

柳助という名はまったくない。

おそらく直臣ではなく陪臣であろうということで、同年七月に再度、山口県文書館を訪ねた時に専門研究員小山良昌に勧められて『元陪臣帳』という明治四年以降の明治初期に作られた七冊からなる毛利藩の旧陪臣名簿を見たが、そこにもなかった。その他、鶴助が三田尻で維新後も旧藩主の茶道や華道の相手をしたというので、三田尻の御茶屋関係の文書もいくつか見たが、一切出てこないのである。

話が前後するが、初めて山口県文書館に行った際、防府の羽仁吉一の親戚も訪ねることにして、防府市お茶屋町八番一二号に居住する羽仁正人、政枝夫妻に会った。羽仁鶴助の次弟政之助の四男広介の三女が政枝で、正人は中村家から養子にきた人だという。この夫妻から直接、聴くことができたのは政枝の父母広介、フミノから伝え聞いた話である。それによると先祖はやはり平郡島から出ており、先祖の一人に平家の落人小林丹波守という人がいたことや、平郡島の西端にある蛇の池にまつわる伝説も聞いた記憶があるという。

その先祖は毛利家の水軍に仕官して、いつの頃か、多分江戸時代に水軍の根拠地三田尻にきたのだろうというのである。もし、この夫妻の記憶がなければ、羽仁吉一の先祖は三田尻以前に遡ることはできないところであった。やはり平郡島かと思い、夫妻もまだ行ったことがないという未知の島に言い知れぬ興味を覚えたことである。また、この時に鶴助の父母が柳助、タ子（たね）であることも聞かされ、のちに戸籍や寺の過去帳から、そのまた父が政六であることもわかったのだが、その問題は後にのべることにする。

ともあれ、平郡島に行けば手懸りがあるに違いないと思ったことである。そこへ昭和五三年（一九七八年）に『平郡島史』という本が出版されたこともわかり、防府からの帰途、出版元の山口県徳山市のマツノ書店に寄って、同書

を購入した。著者は境吉之丞といい、敗戦まで平郡島の村長をしていたが、なお島に健在であることもわかった。そこで著者宛に手紙を書いて、訪ねたいといったところ、家に泊ってもらってもよいという好意的な返書がきた。

昭和五五年（一九八〇年）五月、まず柳井を訪れる。柳井市立図書館長谷林博が『平郡島史』に序文を書いているので、島の様子を予め知りたいと思ったからである。谷林は史跡調査では何度も平郡島に渡ったことがあるが、羽仁家については知らない。しかし戦後間もない頃、羽仁五郎が柳井に来たのに会ったことがあるとのことだった。

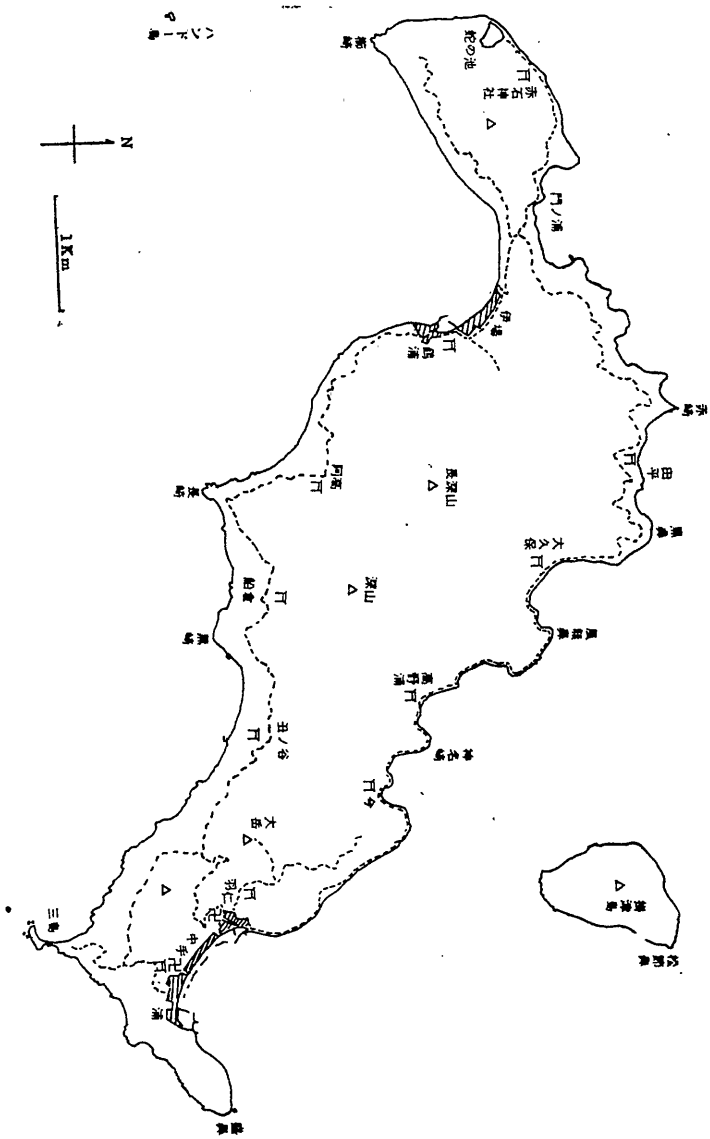
それから、いかにも晩春の気配が立ちこめる雨後の柳井港をあとに平郡航路のしおかぜ丸という百噸余の船で未知の島に向かった。定員は一五〇人というが、その日は一〇人あまりの乗客しかなく、甲板に一人たたずんで暮れなずむ多島海を眺めていると、春の瀬戸内海、ここだけは地中海もその比ではない――といった言葉をかつて横光利一が書いていたのを読んだ記憶がよみがえってきた。たしか昭和一〇年代の『婦人之友』のグラビアに載っていた文章[5]であり、これもなにかの因縁かと思ったことである。

船は一時間ほどで平郡島に近づき、西浦という港に入る。数人が降りて、さらに三〇分ほど島に沿って廻ると東浦である。人家はこの二つの港の附近にしか見当らず、あとはすべて山地である。平郡島は面積一六・七平方粁、大島につぐ山口県下第二の島であるが、現在、人口は一五〇〇に満たず、若干の漁業と農業が行われるだけで、年々減少する過疎の地だという。江戸時代には毛利水軍御手舸子（おてかこ）の百人株を持っていたといわれ、明治以降も海軍に志願する者が多かった。土地共有制や同族戸籍で民俗学的にも興味が持たれているらしい。もとは大島郡平郡村であったが、昭和二九年（一九五四年）五月に柳井市に編入された。

東浦から北西へ一粁ほどの土地が羽仁である。昔、鳥の羽根が落ちていたところからつけられた名称だという。『山口県風土誌』として編集収録された明治年間の「平郡村村誌」にも「羽仁（由来書に羽根に作り、昔鳥の羽の落ちたるを以て名つくる由に云えり）」[6]とある。享保一二年（一七二七年）から宝暦三年（一七五三年）にかけて上申された各村落の状況の記録『地下上申』の大島郡平郡島の項には「浦」として「中手　羽根　浦　鶴甫　射場　阿宗　寺付」[7]の七つがあげられており、始めは「羽根」と呼ばれていたことがわかる。また天保一二年（一八四一年）から編集が始まった『風土注進案』によると、「大嶋郡平郡島」の項に「村内小名之事」として、「西浦人家有之　鶴甫人家有之　羽仁人家有之　東浦人家有之　右之内西浦鶴浦村共嶋之西ニ当リ、東浦羽仁村共嶋之東北ニ当リ申候」[8]とあり、江戸中期から末期の間に「羽根」という地名が「羽仁」に変ったことがわかる。

その地区にはなるほど羽仁保育園というのもあり、海岸からすこし入った、やはり羽仁地区の一隅にある境邸に招じ入れられる。この辺りは風が強いため、ほとんどの家は平屋で、いかにも漁村という感じの土地である。境は夫人フサコと二人暮しで、深更まで島の歴史や自分の歩んできた道を語ってくれた。境は明治三〇年（一八九七年）に平郡島に生まれ、呉の海兵団に入って海軍一等機関兵曹となり、のち帰島し、昭和一六年（一九四一年）には旧平郡村の村長になり、戦後は柳井市の教育委員や民生委員をして、昭和五三年（一九七八年）に三〇〇頁の『平郡島史』を私家版で発行した。

平郡島の歴史の発端は、この『平郡島史』の附録になっている「鈴木家文書」によると「庄屋鈴木家家系」として、「藤代大権現九拾代之後裔鈴木帯刀之介仲光　紀伊国藤代城主鈴木三郎重家之男也同国早田住居木曽義仲公平宗盛追討之時為荷担其之後京都合戦之依味方敗軍供奉幼君部栗丸家来拾六人引連吉野道入山伏之姿と成須々落去後四国



平郡島略図　境吉之丞著『平郡島史』より

宇和小船乗込文治元年九月此之嶋渡黒木山切開丸山居城構其後幼君死去故部栗嶋と名付早田八幡宮勧請以君霊若宮崇祭従伊予国竜福寺弟子八幡坊号時余仲光寛元弐年正月八拾八歳卒去」[9]とある。

境によれば、この「鈴木家文書」は分家鈴木良助の家に残っているもので、良助死後、妻ヤスコは他地に移住し、現在どこにあるか不明とのことである。引用の部分は『平郡島史』に収録する段階で誤写があるのではないかと思われる文章だが、その大意は、平郡島の庄屋鈴木家の先祖鈴木帯刀介仲光は源義仲、いわゆる木曽義仲の家臣であったが、義仲敗北の際、一子部栗丸を擁し、吉野から宇和島へ逃れ、文治元年（一一八五年）にこの島に到着し、幼君死去後、その名に因んで平郡島と名づけられたというのである。だが、これは伝説とされ、史実として確かではなく、源義仲の子に部栗丸というのがいたかどうか、調べたが不明というほかはなかった。

たとえば橘太郎の「木曽義仲及び其子孫と上野(一)」[10]という論文の「木曽系図」によると、義仲には四人の息子と一人の娘があったことになっており、「義高　清水冠者、母者中原兼遠之女巴　寿永三・四・二十六死」、「義重　仁科二郎、後称原信濃守、母者巴」、「義基　朝日三郎、母同（西筑摩郡誌に母を那波広澄の女となす）　弟義宗と共にその外家沼田家国に匿る　嘉禎二・八・六死、正堂院殿覚玄勇大居士（東筑摩郡塩尻村永福寺、木曽系図に義延坊念信とありと）」、「義宗　朝日四郎、母者沼田家国女（西筑摩郡誌に母を多胡家国の女となす）（武蔵国大石氏系図には母大室太郎泰貞女とありといふ）」、「女子　鞠子、母者藤原基房女　鎌倉将軍頼家室」とあるが、部栗丸とか平郡丸といった名前は出てこない。この論文には、系図の出処は記されておらず、系図が正確という保障もない。もっとも、系図にはない人物が実在するという例もある。

『平郡島史』が参照している、前記『風土注進案』の「大島郡宰判　風土注進案　平郡島」には「但藤代権現八拾

九代後胤紀伊国城主鈴木三郎男鈴木帯刀介仲光、同国甲田住居木曽義仲公御荷担申、都敗軍之砌主従拾六人連ニ而落去仕、平郡嶋え罷越黒木山ニテ人家も無御座候所切開仕、彼所え小城を構へ追々人民等招寄、天文年迄六代之間居城仕候」[11]とある。さきの「鈴木家文書」とほぼ同じ趣旨であるが、部栗丸云々はなく、平郡島の名の由来には触れられていない。

なお昭和六年（一九三一年）発行の御薗生翁甫著『防長地名渕鑑』には「平郡島　周廻七里十九町五十三間、一島一村をなす。今平郡村と云ふ。倍具里の訓を厭ふてなり。按るに武内宿禰の子平郡木菟宿禰の子孫、韓海部首となりて帰化韓人の海部を掌るものあれば、平郡島も亦、或は此氏族に縁あるものなるべし。大和国平群郡平群郷あり、神名式に同郡平群坐紀氏神社あり、平群氏の其処に住めるものが祖神を祭れるなり。其他安房国平群郡あり、日向国児湯郡平群郷あり。是等亦平群氏に因りて名を負へることと知られたり。以上参考すべし」[12]とある。他の「平群」の名のついた地名と同じく、平群木菟宿禰に由来するものという説である。

ところで羽仁吉一の先祖について、境は羽仁という姓の家が現在、平郡島に一軒あるが、近年、大島からきたというから、無関係だろうといった。また境の記憶によると、戦後のある時期に大島出身で六〇歳前後の藤井という姓の男の人が東京からきて、羽仁もと子から自分の夫の先祖は平郡島から出ているということを聞いたので調べにきたといったが、なにもわからずに帰ったように思うということだった。この藤井という人物についてはこれ以上なにもわからない。ここから羽仁吉一は妻もと子には先祖が平郡島から出ているという話をしていたことが推測される。

翌朝、この島の寺の過去帳に手懸りがあるかも知れないと思って、羽仁地区にある平見山海蔵院という曹洞宗の寺を訪ねる。この寺はかつて文永年中（一二六四年―一二七五年）に開基された浄土宗石山円福寺であったが、　のち明治

六年（一八七三年）、平郡島西部にあった海蔵院をそこに移転させたものだという。住職井上玄智から過去帳を見せてもらったが、羽仁姓はなく、ほとんどは無姓で名前と戒名だけが記されていた。ついで中山手地区の浄土真宗河内山浄光寺も訪ねる。ここは開基の年は明らかではないが、寛永二年（一六二五年）に現在の地に移転された。住職神代海印は不在だったが、見せてもらった過去帳には「羽仁」という文字が多数出てくる。だが、それは姓ではなく、地名を指している。そのなかに「安永四年九月二日　釈妙迎信女　羽仁　庄助娘　三田尻ニテ死ス」というのがある。安永四年は江戸中期の一七七五年であるが、その頃の三田尻との交流の片鱗が現れている。

のちに記すように羽仁吉一の父鶴助、母イヨ、祖父柳助、祖母タ子、曽祖父政六というのが、現在判明している吉一の父系の先祖の名前であるが、これらは平郡島関係の史料や過去帳のどこにも出てこないのである。羽仁正人、政枝が父母広介、フミノから聞いたという言伝えと、さきの境が聞いた東京の藤井某による羽仁もと子の発言と伝えられるもの以外に、現在のところ吉一の先祖が平郡島出身であることを明らかにする証拠はないといわざるを得ない。

推測としては平郡島に居住していた吉一の先祖が毛利水軍に出仕して三田尻に移住するに際して、家のあたりの地名の羽仁をとって姓としたということも考えられる。しかし、いつ羽仁姓をつけたか、またいつ三田尻に移ったかは不明という他はない。

平郡島で三田尻との関係がいつ始まったか、さきの『風土注進案』の引用の続きには「元就公宮嶋御軍之砌、七代目鈴木左近と申もの御軍船を御用ニ相立出精仕候、夫より御舸子嶋ニ相成、左近儀支配役被仰付、住所替仕代々相勤申候」[13]とある。毛利元就が陶晴賢を安芸の厳島に討ったのは弘治元年（一五五五年）であるから、その時以来、毛利水軍の根拠地三田尻に平郡島の武士たちが舸子、すなわち水夫として従軍したことになる。

そのことは『平郡島史』にも、「御奈良天皇弘治元年（一五五五年）毛利元就、大内義隆のために陶晴賢を厳島に伐った、その時本島より鈴木左近公以下百人元就のために厳島におくり軍隊輸送の任に当る。その功により初めて毛利氏の幕下となりお手舸子に列せられ、本島一円を舸子給に給わる旨鈴木左近公に命があった。当時の石高は四百四十六石四斗五升五合であった。是を住民の給禄となし各戸別に別(ママ)けて百株にした」[14]とある。

なお『防長地名渕鑑』によると、「三田尻船倉」という地名の解説の始めに、「毛利氏水軍根拠地にして、大小艦船を此処に置く。或は平時の交通運輸に或は不虞の水戦に備ふるなり。艦船の新造修理属具の補給等水軍に必要なる一切の設備を有するは勿論、水軍の将士已下凡百の吏員職工皆船廠を繞りて附近に住居す。正に尨然たる水軍の一大鎮府なりき」[15]とある。おそらく、羽仁吉一の先祖も水軍将士、あるいはその周辺にいた人々の一人であったのだろう。

なお『平郡島史』に引用されている江戸末期の「舸子給増石に対する免租の嘆願」に関する文書のなかに「羽仁権少属」という人名が一箇所出てくるが[16]、この人名について、境はどのような人か一切わからないといっている。また『平郡島史』には島出身の「陸海軍の人名簿」が収録されており、そこには昭和一五年（一九四〇年）の欄に「羽仁勉」という人名があるが[17]、これも不詳である。さらに羽仁正人、政枝から聞いた先祖の人名「小林丹波守」のことが気に懸っていたので、境に尋ねると、島の西浦にある重道(しげみち)八幡宮と東浦の早田八幡宮の宮司を兼ねているのが小林稔という人だから訊いてみたらどうかといった。現在は「重道」と書くが、古文書には「重通」となっている神社である。電話をかけると小林は調べてみるとのことで、後日の回答では「小林丹後守」というのは昔の神主にいるが、「丹波守」という人はいないとのことだった。あるいは羽仁正人らの聞き誤りかも知れない。

小林丹後守については、さきの『風土注進案』に重通八幡宮のこともべられており、そこには「欄外」として「神主小林丹後書出　弘安三庚辰四月建立」[18]とある。弘安三年といえば一二八〇年で、室町時代の、いわゆる元冦の役の最中である。これは神主小林丹後がのちに神社の沿革を記した部分と思われる。その小林丹後については、『平郡島史』に記載された史料にも、出典は記されていないが、早田八幡宮に関する記録として「元文二年己拾壱月　小林丹後」[19]とある。また重通八幡宮についての記録には「浅海氏の城住記に次の如く残されている」として、「慶安肆辛卯暦　神主丹後大夫地下敬白」[20]の文字がある。元文二年は江戸中期の一七三七年であり、慶安四年は江戸前期の一六五一年である。小林丹後守は世襲の名前であったのではないだろうか。

かりにこの小林丹後守が羽仁家の遠い先祖の一人であったとしても、それはあまりに昔のことで、江戸末期の吉一の曽祖父政六とどのようにつながるのか、不明というほかはない。

(1) 羽仁説子著『私の受けた家庭教育』婦人之友社、昭和三八年。
(2) 羽仁恵子編『羽仁吉一先生逝去二十年にあたりて』発行所無記、昭和五〇年、一三頁。
(3) 吉田祥朔『増補近世防長人名辞典』マツノ書店、昭和五一年。
(4) 山口県文書館編『萩藩閥閲録』全四巻「遺漏」一巻、山口県文書館、昭和四二―四六年。
(5) 『婦人之友』昭和一六年三月号、横光利一「春の瀬戸」の末尾「どんなにこれに反抗しやうともいかんともなし難いある美しさが、たしかに春の瀬戸の波の上にある。ここだけは地中海の比ではない」。
(6) 近藤清石編『山口県風土誌』(一)、歴史図書社、昭和四七年、一一三頁。
(7) 山口県地方史学会編『防長地下上申』第一巻、マツノ書店、昭和五三年、四一二頁。
(8) 山口県文書館編『防長風土注進案』第二巻、大島宰判下、山口県立山口図書館、昭和三六年、四四七頁。
(9) 境吉之丞著『平郡島史』私家版、昭和五三年、二九一頁。
(10) 『上毛及上毛人』第二六七号、上毛郷土史研究会、昭和一四年七月。

(11) 前出『防長風土注進案』第二巻、大島宰判下、四六四頁。
(12) 御薗生翁甫著『防長地名渕鑑』防長倶楽部、昭和六年、一五一頁。
(13) 前出『防長風土注進案』第二巻、大島宰判下、四六四頁。
(14) 前出『平郡島史』六一頁。
(15) 前出『防長地名渕鑑』三四九頁。
(16) 前出『平郡島史』七二頁。
(17) 前出『平郡島史』二六六頁。
(18) 前出『防長風土注進案』第二巻、大島宰判下、四六一頁。
(19) 前出『平郡島史』四二頁。
(20) 前出『平郡島史』二〇頁。

第二章　郷里、生家、少年時代——三田尻

羽仁吉一の父系の先祖はいつの頃か平郡島から三田尻にやってきた。そして吉一が生まれ、育ったのも三田尻である。三田尻とはどういう土地だったのだろうか。

三田尻は現在、山口県防府市の南部、瀬戸内海に面した港のあたりの地名として残っているに過ぎない。だが古くは毛利水軍の根拠地であり、中関(なかのせき)とも呼ばれ、塩田や塩の積出し港があり、むしろ防府の中心地で物産交易のさかんなところであった。温暖な気候、穏和な風土に恵まれ、長州という保守的な土地柄のなかでも自由な気風があったといわれる。国鉄山陽本線の防府駅も昭和三七年（一九六二年）一〇月までは三田尻駅であった。現在は、昭和一一年（一九三六年）から市制が敷かれた防府の一部で、天満宮のある宮市の商業地域に対して、工業地域と呼ばれている。

防府は周防国の国府という意味であるが、三田尻の語源には諸説がある。『地下上申』には「三田尻村」の項に「但三田尻と申儀は、明覚寺西ノ方ニ久保田と申弐反余田地有之、此田三つノ田之尻にて先年はほのきにも三田尻と有之由ニ御座候へ共、いつ之頃よりか久保田と書申候、三田尻とは従是申ならハレたる由申伝候事」[1]とあり、『風土注進案』にも「当村名の起リハ岡村に植田へ水をあつるに、うへの田三ツより余る水、自然と流れ入りて過不及なく順作ならしむる上田あり、其三ツの田すそ尻に有る名田故に三田尻を村名と唱へ来り候由老翁申伝へ候」[2]とある。

しかし『防長地名渕鑑』によると「三田尻」の項に、「神功紀」によれば上古にはのちの三田尻が含まれる沙麼県に朝廷の屯田、すなわち御田があり、「按るに三田は沙麼の御田の後に当れば名づくる歟」[3]とある。そして高橋文雄著『山口県地名考』[4]はこの説を支持している。

羽仁正人、政枝の話によれば、羽仁吉一の祖父柳助の時代に住んでいたのは、昔、桜馬場と呼ばれて、現在、羽仁正人邸のある防府市お茶屋町八番一二号だという。かつて政枝の祖父羽仁政之助の住んでいた家を現在のものに建て替えた際、襖の下張りから三田尻海軍局という名称を附された銃操教授の書類や銃砲図が出てきたこともあった。その後、おそらく羽仁鶴助の代に現在の防府市三田尻一丁目一〇番二五号に転居し、そこで吉一が生れたということである。それは防府市労働会館の裏で、現在は村井工一という人の邸宅になっている土地である。

話が前後するが、羽仁吉一の家系が曽祖父政六まで判明したのは、羽仁進に頼んで、すでに「除籍」という名称になっている古い戸籍謄本を防府市役所から取寄せたのを見せてもらったからである。戸主が羽仁鶴助になっている除籍謄本によると、本籍地は「山口県佐波郡防府町大字三田尻千参百参拾弐番地」とあり、「父柳助」は文政二年（一八一九年）八月一三日に生れ、明治二〇年（一八八七年）一二月一九日に亡くなっている。「母タ子」は山口県佐波郡三

田尻町の西村伊八の長女で、文政二年（一八一九年）一〇月八日に生れ、天保一一年（一八四〇年）一〇月一五日に入籍、明治二四年（一八九一年）一一月二日に亡くなっている。「戸主羽仁鶴助」は嘉永三年（一八五〇年）一月一〇日に生まれている。もう一通、羽仁吉一が戸主になっている除籍謄本によると、鶴助は大正四年（一九一五年）二月一〇日に亡くなっている。先の除籍によると、鶴助の「妻イヨ」は山口県佐波郡牟礼村の内藤茂平の二女で、万延元年（一八六〇年）四月一二日に生れ、明治一〇年（一八七七年）二月一七日に入籍している。なお除籍には記されていないが、亡くなったのは前述の墓石からわかるように、昭和一二年（一九三七年）四月六日である。

そして羽仁吉一は明治一三年（一八八〇年）五月一日に生れており、父鶴助の死とともに家督を相続し、昭和二年（一九二七年）三月一七日に東京府豊島郡高田町大字雑司ケ谷千八百八拾八番地に転籍している。また羽仁政六については戸主が鶴助になっている除籍の「父柳助」の項に「羽仁政六長男」とあることから名前が知られるだけである。なお羽仁家が士族であったことは羽仁進に見せてもらった昭和五五年（一九八〇年）五月九日付の除籍にはなにも記されていない。しかし羽仁正人、政枝に見せてもらった昭和四三年（一九六八年）三月二八日付の同じ除籍では「族称　士族」の文字がある。この二つの時点の間で、戸籍や除籍から士族とか平民といった族称を抹消する作業が市役所において行われたためであろう。

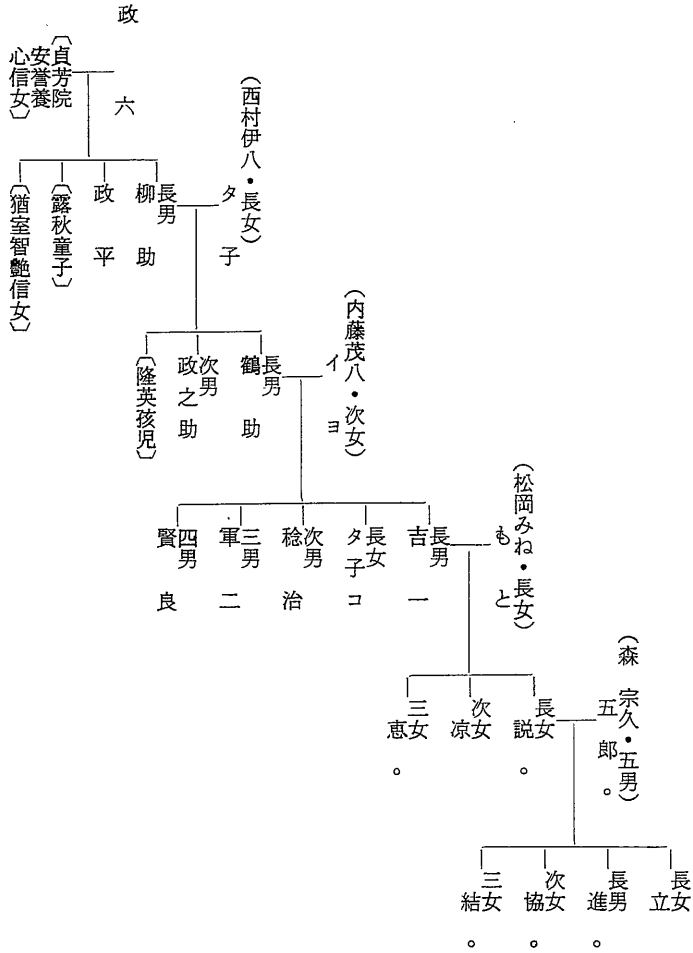
除籍から判明したのは羽仁吉一の曽祖父までである。一般の歴史文書にも名を留めているような人はともかく、そうでない人にとっては、除籍以前の先祖を知る方法は寺院の過去帳しかない。そこで羽仁正人、政枝の家の菩提寺である防府市東三田尻二丁目八番八号の浄土宗龍浦山専光寺を訪ねた。羽仁鶴助、イヨはのちに記すように、明治末年にプロテスタント・キリスト教に改宗するが、それまではやはりこの専光寺の檀家であったと聞いたからである。ま

た羽仁正人家の仏壇にある位牌の文字も教えてもらい参照することができた。

ところで住職稲田達円の話によると、この専光寺はもと浄土宗龍浦山専称寺と称していたが、明治二年（一八六九年）にやはり三田尻にあった浄土宗法林山雲光院が、毛利藩に仕えて村上水軍の名を轟かせていた檀家の村上家が元の大島に帰ることになったのを機に専称寺と合併し、両寺の名を一字づつ取って専光寺と改称したという。その雲光院の過去帳の最古のものには万延元年五月（一八六〇年）二十二日に筆写したという記載がある。

明治以前の雲光院の過去帳には一〇人ほどの羽仁姓の俗名と戒名が記されているが、そのなかで羽仁正人、政枝の見解では約半数が政六の直系の人々であろうという。雲光院の過去帳に名があったことから羽仁の先祖と村上家、さらに平郡島と村上水軍の関係が考えられるが、この問題に関しては他日を期したい。その過去帳によると羽仁政六は生年月日は不明だが、亡くなったのは嘉永四年（一八五一年）三月一二日で、戒名は「仁光院円誉理応信士」となっている。政六の妻は俗名もわからず、「羽仁政平母」とあるだけで、戒名は「貞芳院安誉養心信女」であった。俗名の文字を戒名にも取入れる例が多いが、政六の場合はそうではなく、ここから政六の妻の名前を推測することはできない。ただし羽仁正人家の位牌には「貞芳院安誉養心大姉」となっていることを附記しておく。

なお政平というのは羽仁政枝の曽祖父に当り、政六の息子である。政六の長男は柳助であるが、政平が次男あるいは三男などであるかどうかはわからない。その他にも政六の息子や娘、柳助の息子で早逝したりしたと推定される者の戒名も記されていた。次頁に掲げたのは除籍謄本、過去帳、位牌から調べた、羽仁政六から羽仁進に至る直系親族の現在までに判明した家系図で、名前のわからない人は戒名を掲げてある。



羽仁家家系図　〔　〕内は戒名、名前の下。のは現存者、通称はもと子、説子、恵子、協子、結子であるが、戸籍名には「子」がない。

ところで柳助は漢学にすぐれていたこと、鶴助は維新後、毛利家の茶道や華道の師匠をしていたことが現存する羽仁家の人々の証言で知られている。それに関連して、三田尻には承応三年（一六五四年）に藩主毛利綱広が建てた藩の公館で御茶屋と称した建物があり、のち英雲公と呼ばれた藩主毛利重就が隠棲の地としたため英雲荘と名づけられた邸宅と庭園があり、史跡となっている。お茶屋町という現在の地名はその名残りである。その英雲荘のなかに花月楼という茶室があり、明治になってからも旧毛利藩主が茶会を催したというから、鶴助はここに出入りしていたと思われる。

吉一の長女説子は著書『私の受けた家庭教育』のなかで、そのことに触れ、「父の生れは山口県。母のほうもそうでしたが、どちらも下層武士の家庭ですから、明治維新に対して積極的な希望をかけていた階層です。父のほうは、かつての毛利大藩のわけですが、直接、仕えたのは毛利の隠居の殿様で、祖父は花やお茶の相手をしていたといいますから、武士の家としては格式ばらない、文化的な雰囲気をもっていたようです」[5]と書いている。

いままで、羽仁吉一の先祖をおもに父系をたどって探ねてきたが、吉一がのちに松岡もと子と結婚して以来、女を生かす思想から夫人を立てて自分は陰に廻ったということからいえば、むしろ吉一の母系を重視すべきであるかも知れない。吉一のフェミニズムは、あるいは母親の影響によるのではないだろうか。男の子は父親を憎み、母親を慕うというのが、心理学的に見て少なくない現象であり、エディプス・コンプレックスと呼ばれている。それほど強いものではないにしても、とくに息子は父がおとなしく、母が強い場合、父よりも母から影響を受けることは考えられる。吉一の父はどちらかといえばおとなしい男性で、母はやや強い女性であったようである。

ここで鶴助の妻、吉一の母であったイヨについて少しのべておきたい。孫に当る説子のさきの著書のなかで、「さっさとよく働くおばあさんで、自分のことを話すときに、よく、しわくちやばあさんが……と言い言いしましたが、父に似てすらりとした、むかしはどんなに美しい人だったかしらとおもわれるような人でした」[6]、さらに「おばあさんは、嫁である私の母の忙しさというか、ものを考える人なのだから世俗のことで煩わしてはいけないということを知っていてよい意味で敬遠をしている、かしこい姑でした」[7]という。

そしてこのイヨは、三男の軍二が明治四三年（一九一〇年）七月二〇日に肺結核で病死したことから、キリスト教に入信したのである。それは東京で勤めていた軍二が帰郷、療養中、プロテスタントの教会に出席するようになり、その感化でイヨも教会で外国の婦人宣教師の指導を受け、受洗したのだという。[8]説子によると、イヨの話として「まだ私ひとりのことだったら苦しくはなかったが、おじいさんもその気になり、家中で洗礼を受けることになった。そうなると、おじいさんにはいろいろ仕事のかかわりあいもあり、うるさいこともいわれるようになった。けれど、私たちはかたく決心したのだし、それを中途でひるがえすことはできない。また、私は嫁として、御先祖からのお位牌をあずけられている。といっても、いまはもう、偶像をおがむことはできないからとおもって、決心して、お寺にゆき、事情を話して、永代の御香料をおさめておねがいをしてきました」[9]とある。

ここから因襲に囚われぬ自由な考えを持ち、進取の気象に富んでいた母親が想像される。このイヨについては、さきの除籍謄本にあった以外のことは現在のところはなにもわからない。吉一が松岡もと子と結婚したのも、もと子のなかに母に共通した姿を見たためではないだろうか。説子の著書にも自分たちの家をさして、「代々、女の開拓した家庭というわけかしら」[10]といっているのは印象的である。吉一の母系の先祖についても調べる必要を痛感するが、い

まはイヨの持つ問題が重要であることを指摘するにとどめておく。

説子の著書では、軍二が「軍治」となっていたり、三男であるのに「父のすぐ下の弟」となっていたり、またアメリカからきた婦人宣教師ウエルスが「イギリスから伝道に来られたウエルス嬢」となっているので、ここで時代としては吉一の幼少期よりずっと下ることになるが、ついでに鶴助、イヨの入信に関する問題を史料によって、できる限り実証しておきたい。

羽仁軍二が帰郷中に通っていたのは日本基督教会三田尻講義所、のちの三田尻伝道教会である。日本基督教会はプロテスタンティズムのなかでも教義と教会を重視する正統主義に立つ長老派の一つで、日本のプロテスタント諸教派のなかでは信徒数最大の教派であった。この日本基督教会は中国地方における所属教会の組織を山陽中会と呼んでいた。その山陽中会による三田尻での伝道がいつ始まったかは定かでないが、『日本基督山陽中会記録』[11]によると、明治三〇年（一八九七年）二月二八日付の前年度の統計として、三田尻講義所は現員一一名、受洗小児一名、転入男三名、女四名、小児三名、転出男一名、女二名、小児一名、安息日学校子供男三名、女三名、大人男一名、女四名、教員男一名、教会諸費三九円九二銭、伝道局三六円三〇銭、合計七六円二二銭となっている。そして山陽中会所属教師のなかに「ヱルス」の名がある。

軍二が出席していた頃と思われる明治四一年（一九〇九年）四月二八日の中会記録によると、広島教会で開かれた定期中会の記事に「三田尻の伝道概況を田村兼介より報告せらる。三田尻は由来伝道困難の地と称せられ居りしも、近来著しく恩恵現はれ、昨年五月以来、大人八名の受洗入会者を得、其他信者の当地に転住し来る者ありて、現今説教会には十四、五名より二十名を上下し、祈祷会十名位、婦人会は毎月一回にして十五名ばかり、日曜学校は甚だ不

振にして僅か十名ばかり也。信徒は各自相和し、一致の精神に富み、求道者も数名ありて将来益々発展の希望あり」とある。そして翌四月二九日の記事には「三田尻の信徒十六名連署を以て伝道教会設立の事を願出づ。二、三の質問ありて之を許可するに決す」とあって、三田尻講義所が三田尻伝道教会に昇格したことを示している。

この山陽中会の記録によれば、この頃の主任伝道者は田村兼介であり、教会は三田尻町中塚にあった。羽仁軍二の名前はどこにも記されていないが、軍二やイヨに感化を与えた婦人宣教師のことは、ある程度判明したのでここでのべておこう。その前にすこし先のことになるが、羽仁鶴助が受洗入会したのち、大正四年（一九一五年）に亡くなったことが、この記録のなかに記されているのであげておきたい。

大正五年（一九一六年）四月二〇日に広島教会で開かれた日本基督教会山陽中会の中会記録によると、竹谷（名前不詳）の報告のなかに「三田尻教会五ケ月も無牧なりし上に昨年中に羽仁平野の二兄姉を失ひしこととて全く荒れ居たり、目下恢復の緒につき求道中の青年少なからず、中には毎日曜五六哩の遠方より出席するものもあり」とあるなかの「羽仁」は明らかに鶴助を指している。

羽仁鶴助、イヨが三田尻の教会において重要な役割を果していたことは、島本久恵の小説『花と松柏』のなかに、「羽仁家は父母ともが早くからの信者で、教会のことにも尽くし、本国を遠く離れて来ている牧師も何彼に羽仁家を頼りにするし、長幼みなに敬愛されて、またたしなみの中から華道の教授もされているという」[12]とあるところから窺われる。因みに、島本久恵は大正二年（一九一三年）から大正一一年（一九二二年）まで『婦人之友』の記者であったし、この小説は羽仁吉一、もと子が主人公であるといってもよい作品である。

ともあれ、この三田尻伝道教会はその後も発展することなく、所在地もいくつか変って、昭和六年（一九三一年）

発行の『基督教年鑑』昭和七年版には「三田尻伝道教会　三田尻本町　無牧」[13]として載っているが、翌昭和八年版の同年鑑からは消えており、その間に廃止されたと考えられる。

ところで、さきの羽仁説子の著書に「ウエルス嬢」とあり、山陽中会記録には「ユルス」あるいは「エールス」と表記されている婦人宣教師については『基督教年鑑』一九四〇年版[14]の「宣教師名簿」によると、リリアン・アンナ・ウエルス（Miss Lillian Anna Wells）とあり、一八七二年（明治五年）六月二一日米国イリノイ州モリーン生れ、一八八〇年（明治一三年）受洗、ニューヨーク州立師範学校、ニューヨーク聖書神学校、ニューヨーク伝道者養成学校卒業、按手礼未受領、一九〇〇年（明治三三年）八月三〇日来日、所属教派長老派、前任地北星女学校、松山、徳山、現住地山口、現職名教育伝道師（Educational Evangelistic）、現住所山口市野田一三番地となっている。そして『基督教年鑑』一九六五年版[15]では、住所東京都港区青山南町五丁目四五番地四七号とあるが、同年鑑の翌年版には「名簿篇・逝去者」の欄に、昭和四〇年（一九六五年）二月二日に九四歳の高齢で亡くなったことが記されている。ウエルスに関する記録のなかで「按手礼未受領」とあることは洗礼を授ける資格がなかったことを意味する。羽仁説子が『私の受けた家庭教育』のなかで、祖母イヨがウエルスから受洗したかのように、「外国人の、しかも女の方からキリスト教の洗礼を受けるということはよくよくのことであったのだろうとおもいます」[16]と書いているのは事実ではないだろう。

軍二、イヨ、鶴助はだれから受洗したのだろうか。

羽仁吉一のことに戻ろう。弟軍二と両親は三田尻で明治四〇年代にキリスト教に入信したが、吉一が受洗するのは上京後、結婚して子供も大きくなってからであるので、ここでは吉一の入信については論及しない。ともあれ、のち

に自ら進んでキリスト教に改宗するといった自由と信念を持つ両親に育てられて、吉一は三田尻の小学校に入学する。

小学校は華浦尋常小学校である。この学校は明治になって新しく作られたのではなく、三田尻講習堂を前身とし、三田尻小学、問屋口小学校、佐波郡第一小学校、華浦小学校をへて、明治二〇年（一八八七年）に華浦尋常小学校になったものである。[17] 毛利藩は代々文武両道を唱導して、防府にも時観園や越氏塾が藩校、あるいはそれに準ずる郷学として建てられてきた。それが明治維新前後に存在した三田尻講習堂につながっている。羽仁吉一が修学していた時期である、明治一九年（一八八六年）の華浦尋常小学校の概況を示す統計によると、「学級数一六、教員数男一六、女二、児童数男二四五、女一四八、校舎七五三坪、運動場七八四坪」[18]であり、当時としてはかなり大きな小学校であった。

この学校を前身とする現在の防府市立華浦小学校の教頭宮崎博之は「明治廿□（一字不明、「二」か）年」という年号の入った『生徒学籍簿』に羽仁吉一に関するつぎの記載があることを教えてくれた。

番号	入学年月日	生徒氏名	生年月日	住所	族籍	父母或ハ後見人氏名	族籍職業	入学年月日 第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	温習科	退学年月日	退学理由	品行性質
八五	明治十八年五月一日	羽仁吉一	明治十三年五月一日	三田尻村	士族	父鶴助	士商			明治廿年四月一日	明治廿一年三月廿七日		明治廿二年三月廿九日	卒業	

小学校時代の吉一はどのような少年であったのだろう。説子の『私の受けた家庭教育』には吉一の少年時代に言及した部分もあり、そこには「父は長男ですが、祖母に似て大柄な美丈夫といった体格でしたから小さいときから大きくみえたのでしょう。六歳ぐらいから才智のある子どもとして漢学塾の先生に目をかけられ、小学校を出たころには、文章をかくことを好んで、秀才といわれ、少年というより青年のようだったということです」[19]とある。この「漢学塾」がどこか、小学校外に塾に行っていたのか、それとも知りあいの塾の教師に目をかけられていたのかは不明である。

吉一の四弟賢良の次男羽仁翹は自由学園男子部に学び、その九期生であるが、『同学会報』という同部の同窓会報の座談会「ミスタ羽仁を語る」においてつぎのように語っている。なお当時、自由学園においては吉一ともと子の二人の「羽仁先生」がいたので、二人を区別するためと、「先生」という言葉よりも親しみのある呼びかただという理由で、吉一を「ミスタ羽仁」、もと子を「ミセス羽仁」というようになり、この呼称は婦人之友社や友の会、あるいは『婦人之友』の誌上でも用いられていた。ところで羽仁翹は「ミスタ羽仁は子供のときに非常に読書が好きであったとみえ、多分読んだものは漢文の四書五経、そのうちに読むものがなくなると、ふすまをはがして、ふすまの下張りというのを読んだとか。ミスタ羽仁の生まれた家は毛利藩の小藩士の家で大したものじゃなかったんですけれども、ふすまの下張りに昔から書いてあるのが張ってあるので、それを片っ端からはがして一生懸命読む。友だちが遊びに来ても一切そういう遊びには目もくれず一生懸命に読む。それが彼の教養の根底をなしていたわけです」[20]と、父親か祖父母から聞いたと思われることを語っている。

吉一が小学校を了えて入学したのは周陽学舎である。この学校は現在、山口県立防府高等学校になっている。『山

口県立防府高等学校百年史』によると、さきの華浦尋常小学校の際にのべたように、毛利藩の文武両道の教育伝統が三田尻講習堂になり、それが一方では華浦尋常小学校に繋がり、一方では周陽学舎に連なった。周陽学舎の沿革は明治八年（一八七六年）、佐波郡宮市の岡村彦兵衛、平佐禎三、三田尻の佐久間克三郎、村上充昌らが佐波郡南部に公立中等教育機関の創設を企図したことに始まる。彼等は右田毛利家当主毛利藤内を立て、募金や建設に着手した結果、明治一〇年（一八七七年）三月一八日に山口県教員養成所計算掛上司渕蔵が会長兼務となり、私立の各種学校でありながら県会の管理を受けるといった公立学校的色彩をもつ変則中学校として開校された。

校地は山口県佐波郡宮市字野崎、校舎は洋風二階建で、この『百年史』に載っている明治一二年度の「文部省第七年報全国中学校表」によれば、教員は男三名、生徒男九八名であった。[21] 明治一九年（一八八六年）には山口県会の管理を離れて私立学校として自立し、上司渕蔵は舎長を辞し、教員であった今川新が舎長に就任した。今川は厳正にして恭謙、古の名儒の風姿があったといわれる。修身、漢文、習字を教え、岳南と号した。佐波郡右田の郷学であった学文堂の大田稲香の高弟で、その稲香は豊後日田の私塾咸宜園を主宰した広瀬淡窓の弟子であった。

羽仁吉一がこの周陽学舎に学んでいたことを確かめるため、昭和五〇年（一九八〇年）四月、防府高校に社会科教諭桑原邦彦を訪ねた。桑原は学校の規則で学籍簿は公開できないが、周陽学舎時代の記録を見ると、羽仁吉一は確かに在学していると言った。吉一が学んでいたのは明治二二年以降、それに続く三年間ぐらいと推定される。いずれにしても今川新が舎長であった明治一九年（一八八六年）一一月から明治二九年（一八九六年）一〇月の間に吉一は学んでいたことになる。

というのも、のちの吉一の著述、とくに「雑司ケ谷短信」のなかに、広瀬淡窓の漢詩がよく引用され、咸宜園の教

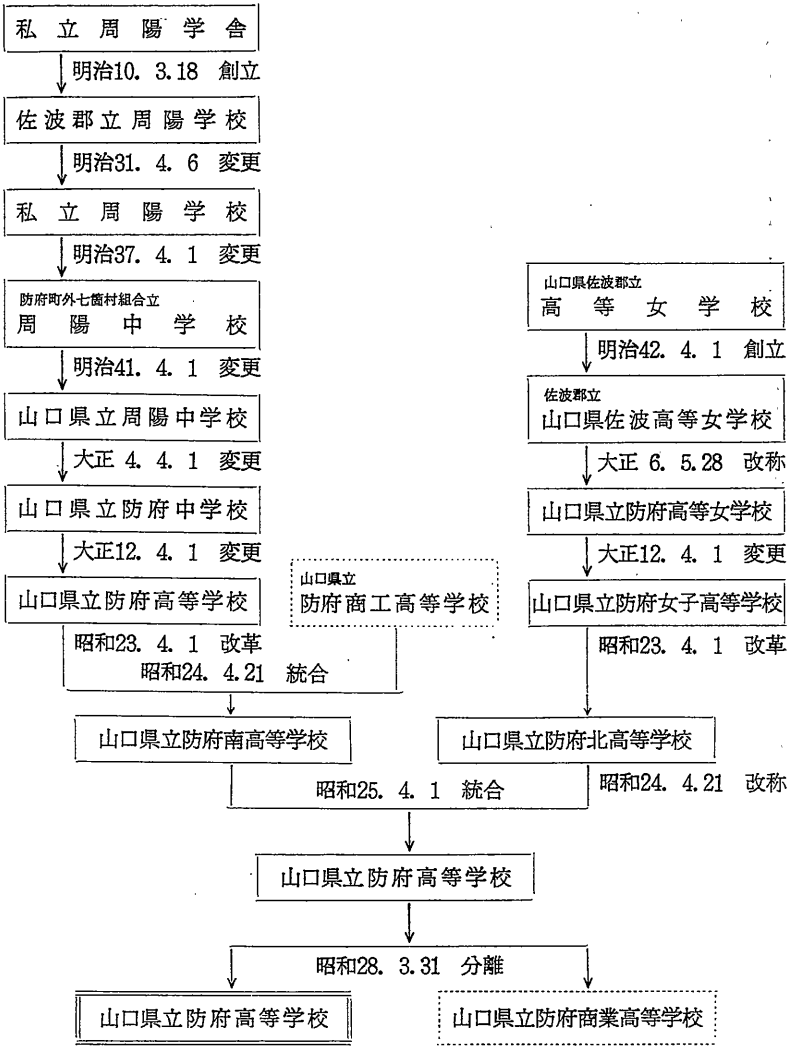
育がしばしば語られているのは、この今川の師の、また師が淡窓であったことの影響によるものと考えられるからである。吉一ともと子の創った自由学園は私立の各種学校で、周陽学舎に倣ったともいえるが、その自由学園の生活において、吉一は淡窓の詩を想起することが多かった。

たとえば「室中僅ニ膝ヲ容ル、粛疎タリ三四間。上ニ一小楼ヲ架ス、歴々トシテ南山ヲ見ル。西北家塾ヲ開ク、蒙士周旋スル所。書声乱竹ヲ穿チ、旦夕琅々然タリ」などとある「卜居」は吉一の心境に共鳴するものがあり、また「道フヲ休メヨ、他郷辛苦多シト。同袍友有リ、自カラ相親シム。柴扉暁ニ出ヅレバ、霜雪ノ如シ。君ハ川流ヲ汲メ、我ハ薪ヲ拾ハン」という「諸生ニ示ス」は寮生に対する好箇の文字であった。

周陽学舎は、その後多くの変遷を経るが、それはつぎの頁の一覧表の示すとおりである。

ところで羽仁吉一はいつ、またなぜ周陽学舎を中途退学したのだろうか。前述の島本久恵の『花と松柏』のなかに、明治三三年の報知新聞社において、婦人記者松岡もと子が編集長中山丙子にむかって新入社員の羽仁吉一のことを尋ねる場面がある。それは中山の回想の形式で、「『中山さん、あの方は』。そして根ぼり葉ぼりたとえば『お国は』『東京に来てはじめは何処に』、『奥さんはいらっしゃるの』、おやと思って僕は一つ一つに知ってるだけの答えをしてやった。『国は山口長州なんだ、三田尻』、『学歴は無しとしている、出京当時の年齢から言ってもそれはそうだろう、まあ中学校を何かのわけで中途でやめたな』」[22]と書かれている。

ここに出京当時の吉一の年齢の低いことが示唆されているから、先の周陽学舎在学の年代と併せて、中退したのは明治二四、五年と考えられる。その中退の理由は説子の『私の受けた家庭教育』によると、さきに引用した吉一の少



山口県立防府高等学校系統図　『山口県立防府高等学校百年史』図28より

年時代の記述に続いて、「たまたま中学生のとき、東京で募集された懸賞政治論文に当選しましたが、選者のひとりに社会主義者の堺枯川がいたということが問題になり、中途退学して上京、新聞社にはいり、ここでも非常な若さで編集主筆陣に加わったりしています」[23]とある。

かつて拙論「女を生かした男——羽仁吉一論」を書いた時、その「懸賞政治論文」は当時の東京で発行されていた新聞と考え、また吉一の周陽学舎在学の時期を明治二九年から三一年の頃と思ったため、『報知新聞』などの主要新聞の明治三〇年前後の号を調べたが、羽仁吉一の名前は出てこなかった。改めて調査したい。もっとも説子の記憶の誤りや吉一が正確なことを話さなかったということもありうるだろう。前述の兄部みや子から聴いた話では、吉一が周陽学舎を中退した理由は家計上の事情であり、上京に際して三田尻の米問屋梶山升二郎の援助を受けたということである。懸賞論文のためか、家計困難のせいか、あるいはそれらが複合したのか、いまのところは不明というほかはない。

なお羽仁恵子が書いたと思われる『羽仁吉一先生逝去二十年にあたりて』のなかの「明治、大正、昭和に歩んで」には、先に引用した部分と重複するが、「羽仁吉一先生は明治一三年五月、山口県三田尻村（現在の防府市）の毛利藩に仕えた士族の家に、羽仁鶴助の長男として生まれ、一八年、五才で村立華浦小学校に入学、同二三年卒業、つづいて私立周陽学舎という漢学塾に入学、三年間漢学を修めて、その後、文筆の仕事に携わる夢を抱いて、あるいは地方新聞へ寄稿したり、華浦小学校の同窓生十数名と同人雑誌『学華雑誌』を発行したりして上京の機会を待ち、明治三〇年、三木善八氏を社主に、箕浦勝人氏を社長にする『報知新聞』に入社することが出来た」[24]とある。

この文章の元になる史料はなにか、吉一の筆になるものか、吉一からの聴取によるものか、それとも他のなにかか

はわからないが、小学校卒業を「明治二三年」としているのは「明治二二年」、そしてのちの問題になるが、報知新聞社入社を「明治三〇年」としているのは「明治三三年」が正しい。報知新聞社入社については説子の著書に吉一の若い頃の写真があって、その裏面に「明治三十三年五月十九日、万世橋畔にて撮影。二月報知新聞入社の日を隔る約百日、記念の為め特に附記す」とあるという[25]から確かであろう。しかし、吉一が三田尻で地方新聞に寄稿したとか、小学校の同窓生と『学華雑誌』を発行したということは、ここ以外には知られていないし、吉一のジャーナリスト、エッセイストとしての資質の早熟を示す貴重な事柄であるので、今後の調査に俟ちたい。

いずれにしても、少年羽仁吉一は明治二〇年代の後半に山口県三田尻を後にして、初めて首都東京に上った。そこは渦巻く政治の世界であり、また華々しい文筆の世界であった。それらを通りぬけて、やがて一人の女性と結ばれたことから、家庭の問題、教育の問題へと目覚めていく。この小論が探究したのは羽仁吉一の先祖の問題、そして郷里と生家および幼少年期の問題であり、それはいわば私的な生涯であった。羽仁吉一のその後の青壮老年期の公的な生涯については、主題を改めて記されなければならない。

(1) 山口県地方史学会論『防長地下上申』第二巻、マツノ書店、昭和五四年、四六八―四六九頁。
(2) 山口県文書館編『防長風土注進案』第九巻、三田尻宰判上、山口県立山口図書館、昭和三九年、二頁。
(3) 御薗生翁甫著『防長地名渕鑑』防長倶楽部、昭和六年、三四五頁。
(4) 高橋文雄著『山口県地名考』山口県地名研究所、昭和五三年。
(5) 羽仁説子著『私の受けた教育』婦人之友社、昭和三八年、二一頁。
(6) 前出『私の受けた家庭教育』一九五頁。
(7) 前出『私の受けた家庭教育』一九五頁。

(8) 前出『私の受けた家庭教育』一九六―一九七頁。
(9) 前出『私の受けた家庭教育』一九七頁。
(10) 前出『私の受けた家庭教育』一九七頁。
(11) 日本基督教団下関教会所蔵史料。
(12) 島本久恵著『花と松柏』筑摩書房、昭和五一年、五三頁。
(13) 日本基督教連盟編集発行『基督教年鑑』昭和七年版、昭和六年。
(14) 日本基督教連盟編集発行『基督教年鑑』一九四〇年版、昭和一四年。
(15) キリスト新聞社編集発行『基督教年鑑』一九六五年版、昭和三九年。
(16) 前出『私の受けた家庭教育』一九七頁。
(17) 山口県防府高等学校編集発行『山口県立防府高等学校百年史』昭和五四年、図1。
(18) 防府市教育委員会編集発行『防府市史』下巻、昭和四四年増補再版、六八六頁。
(18) 前出『私の受けた家庭教育』二二頁。
(20) 『同学会報』一九七五年第二号（通算一三号）、自由学園同学会。
(21) 前出『山口県立防府高等学校百年史』三七頁。
(22) 前出『花と松柏』一〇八頁。
(23) 前出『私の受けた家庭教育』二二頁。
(24) 羽仁恵子編『羽仁吉一先生逝去二十年にあたって』発行所無記、昭和五〇年、一三頁。
(25) 前出『私の受けた家庭教育』一四頁。